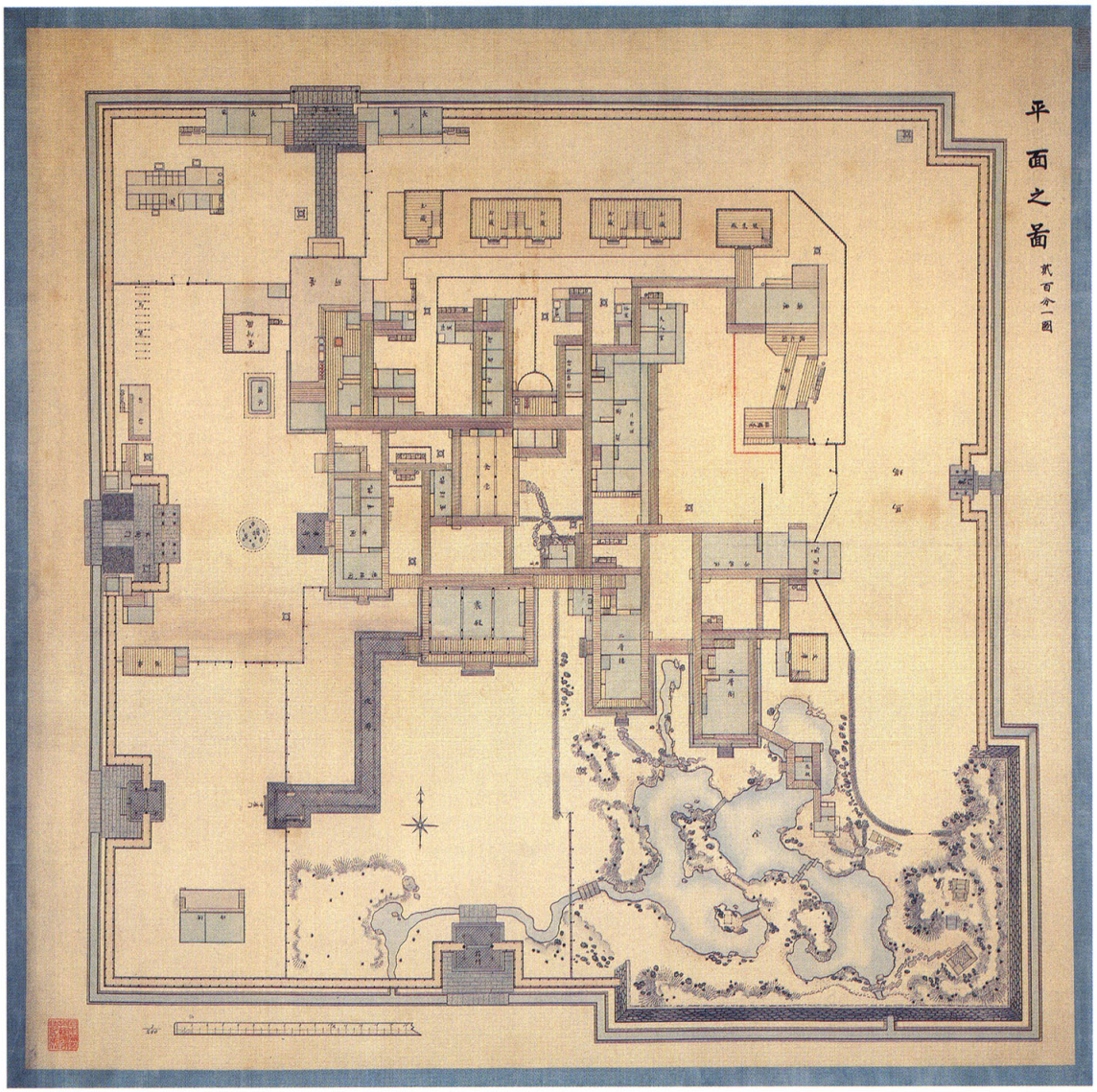


①平面之図

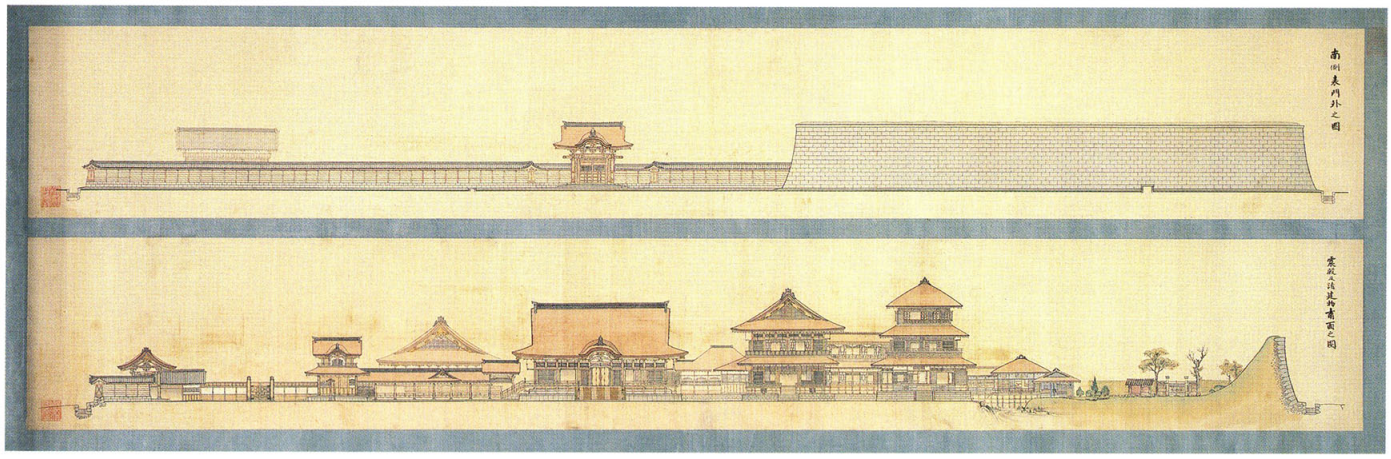
5 伊藤平左衛門（いとうへいざえもん） 明治二十九年帝室技芸員任命

《日本貴紳殿舎計画図》 六点（十点のうち）

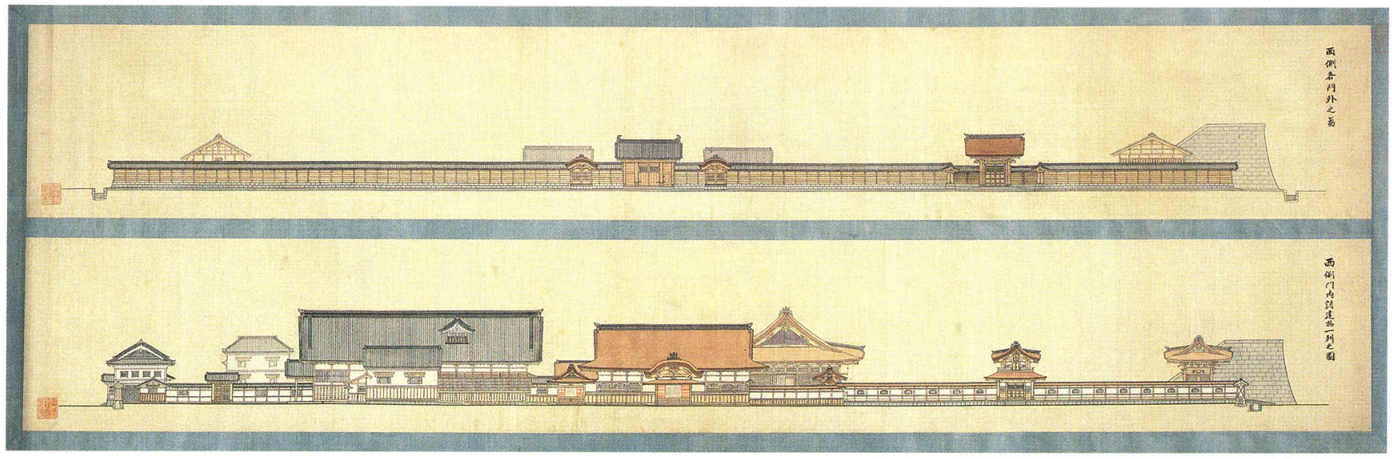
明治三十二年（一八九九）
絹本着色 本紙最大 三五・八×二一六・〇

伊藤平左衛門（九代、一八二九～一九一三）は、名古屋市宮町半ノ切に生まれた。初代は、尾張藩主徳川義直につかえ、藩の御大工役をつとめた人物で、その後三〇〇年余代々藩の作業方をつとめた。九代平左衛門は、愛知県を中心に、庁舎、病院、学校等のいわゆる擬洋風建築や、京都東本願寺御影堂等数多くの建造物を手がけた。明治十一年（一八七八）には、私費を投じて清国に渡り、その建築法を視察研究し、晩年には、最新技術を駆使し鉄筋コンクリート造りによる東本願寺函館別院を建設するなど、生涯を通じて日本建築の改良に努めた。一方で、国内外の博覧会に建築図案や模型を出品。同二十九年には帝室技芸員を拝命した。

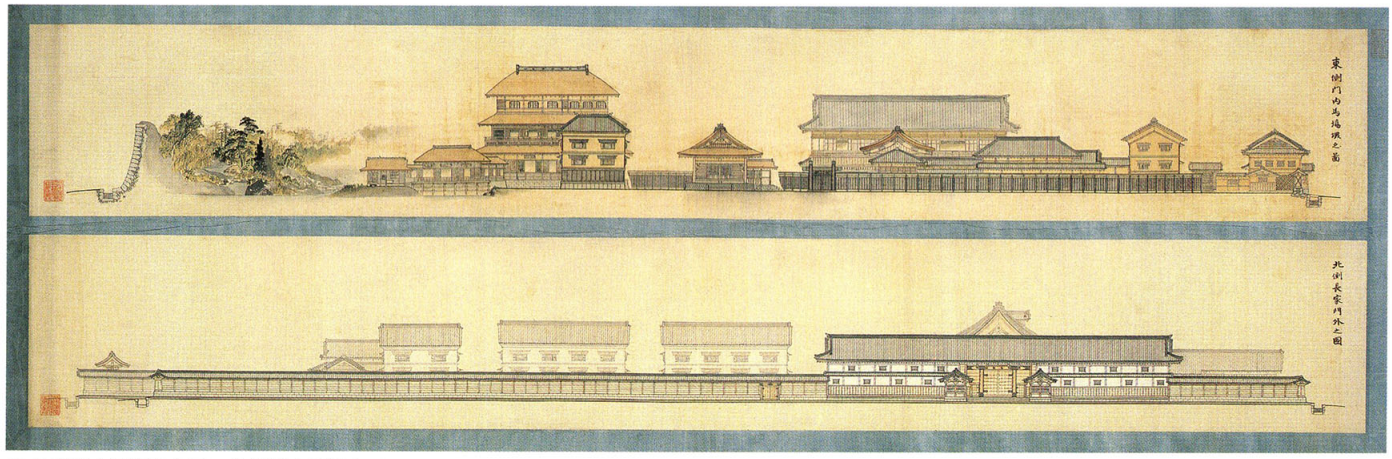
「日本貴紳殿舎計画図」は、伊藤が御下命により、同三十三年のパリ万国博覧会のために制作したもので、金牌を受賞した作品である。宮内省からの「宮殿の図」という要請に基づいて「御殿も、寺観も、武家も、そふいふ区別のない外人に示し、そして日本建築の意匠を見せる」のが目的であったと伊藤は語っている（「名家歴訪録　伊藤平左衛門氏(一)(二)」『京都日出新聞』明治三十二年十月十六日、二十三日）。本作品を見ると、南東部には、庭園の池に面して数奇屋風の楼閣、茶室を配し、東部には能舞台を設けるなど、近世の武家屋敷をモデルとし、南西部には、中雀門、回廊、宸殿を設け寝殿造の要素を加味している。また、内部に目を向ければ、床、襖、欄干、金物などの建具、造作のそれぞれに様々な日本の意匠が凝らされている。このように、伊藤は様々な要素を折衷することで、外国人に対し、総合的な日本建築様式を表現しようとした。さらに、硝子障子を用いたり、既往の建造物にはない二階建ての渡り廊下を取り入れるなど、近代的な新しい創案をも試みている。



②南面表門外之図・震殿及諸建物南面之図

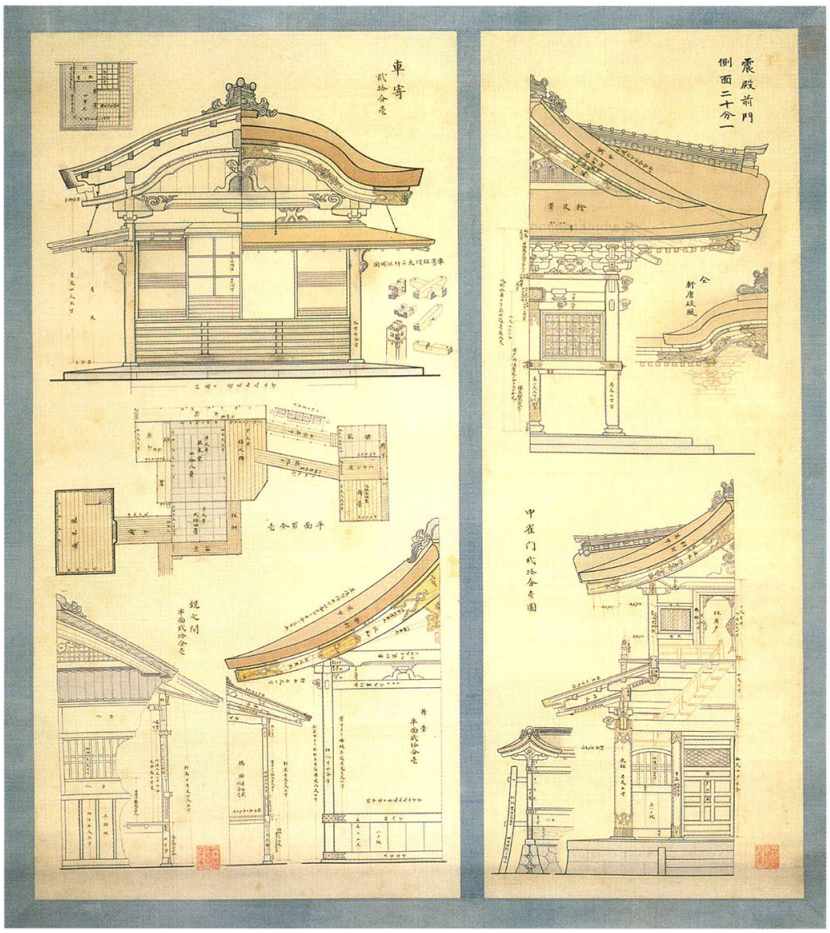


③西側各門外之図・西側門内諸建物一列之図

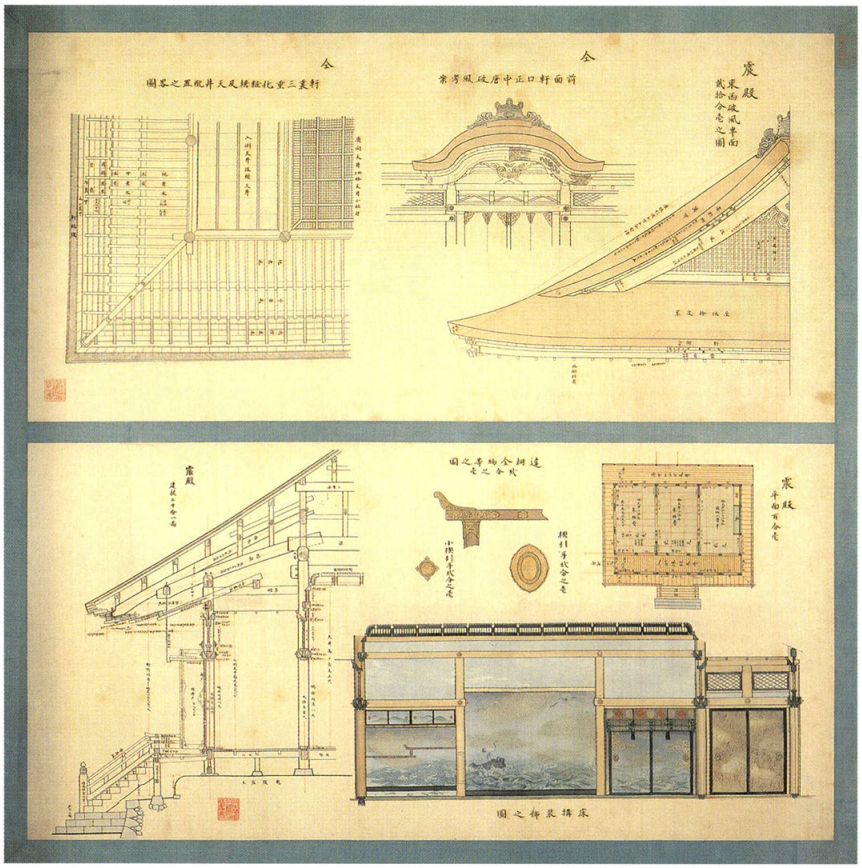


④東側門内馬場堺之図・北側長家門外之図

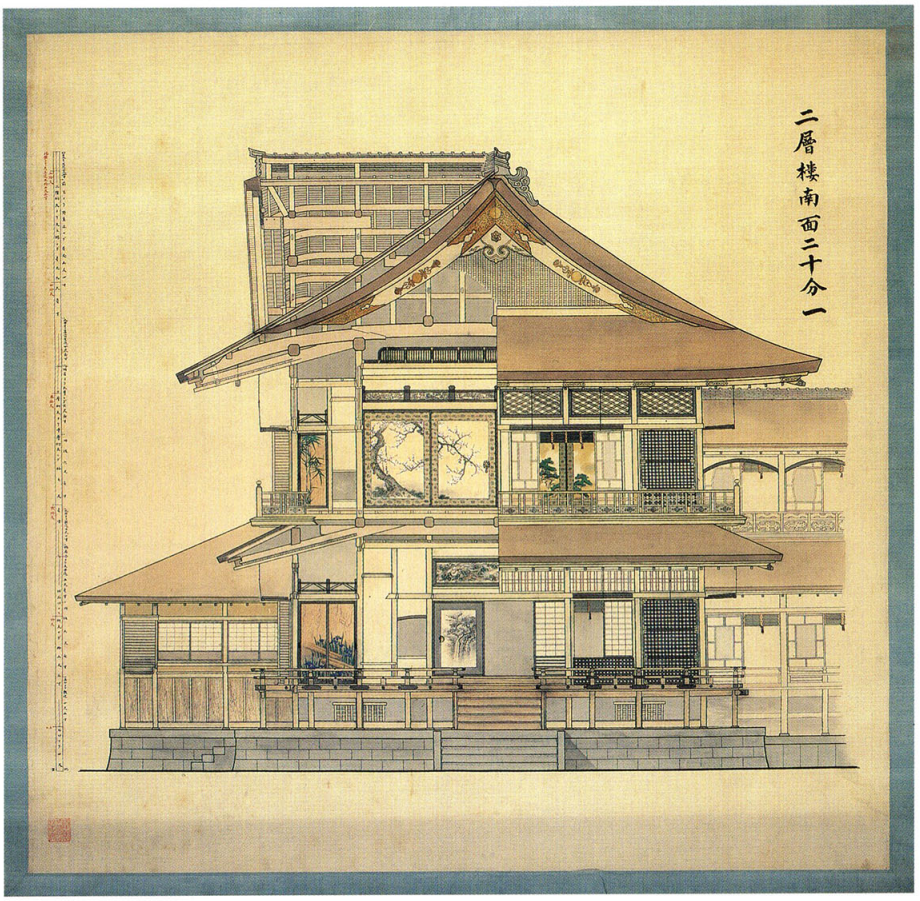
・屋根の構造、部品の名称、寸法等を詳細に記載し、一般の人々への教化を図っている。



⑤震殿前門側面・車寄　他



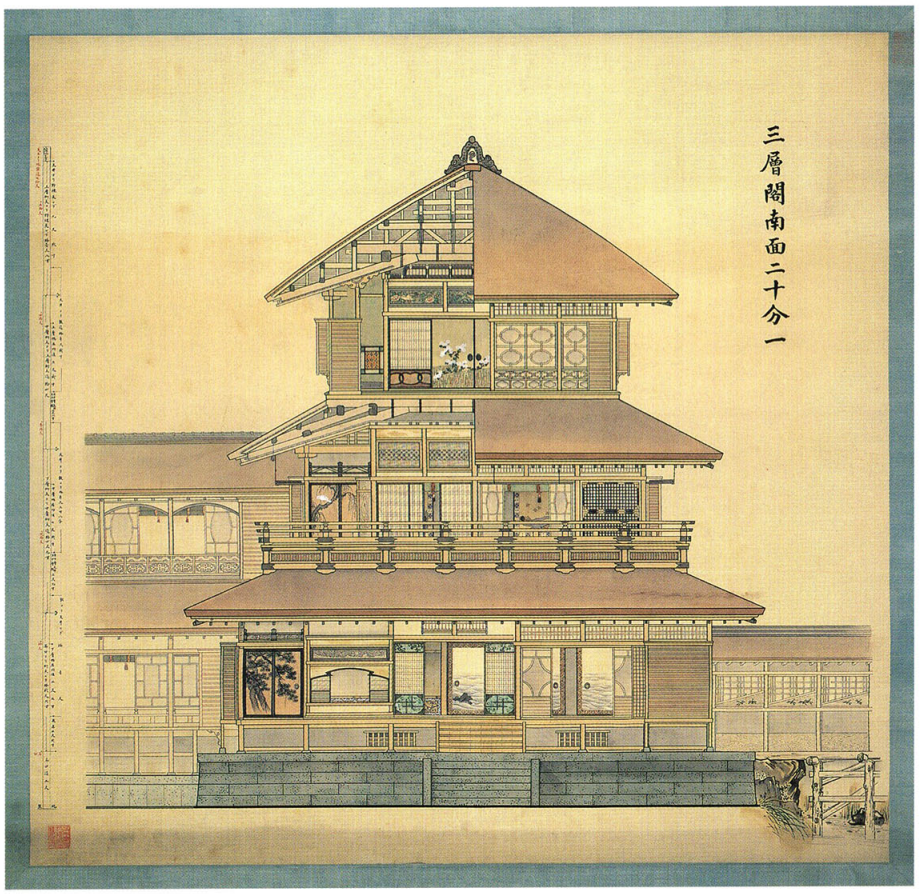
⑥震殿東西破風半面　他



⑦二層楼南面

・障壁画、襖絵には、土佐派や狩野派、琳派、四条円山派といった伝統的な流派の絵画様式を織り交ぜて用いている。これらは、伊藤が考案し、美術学校の卒業生に描かせたという。

・二層楼と三層閣は、二階建ての渡り廊下でつながっている。



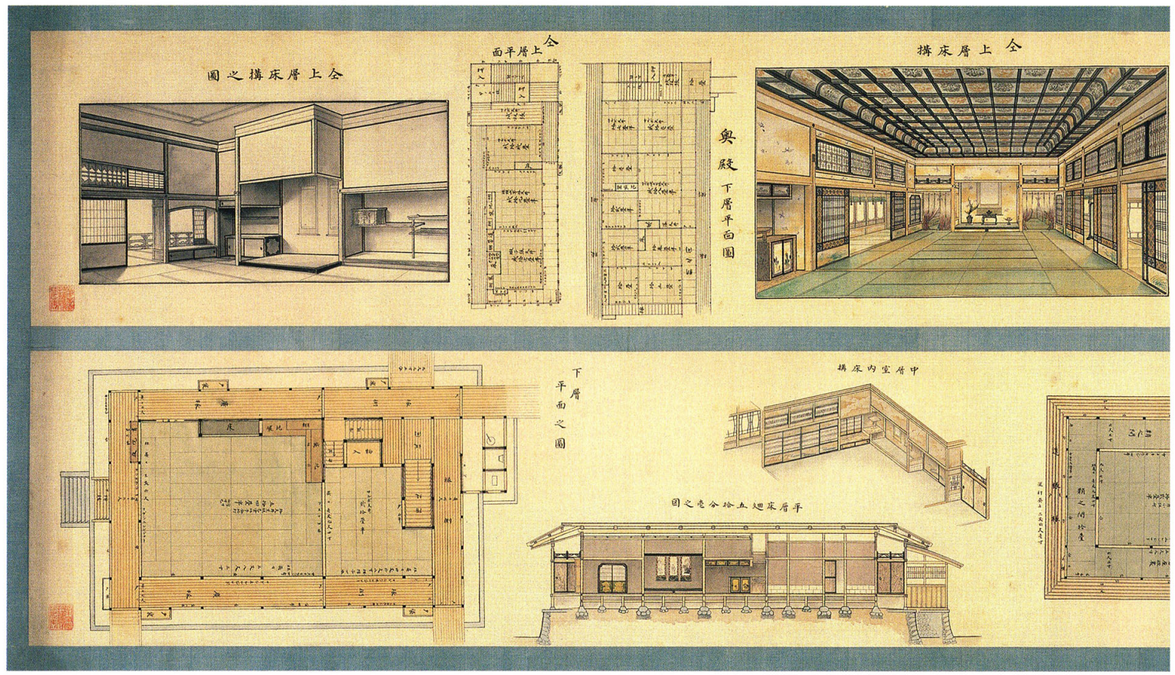
⑧三層閣南面

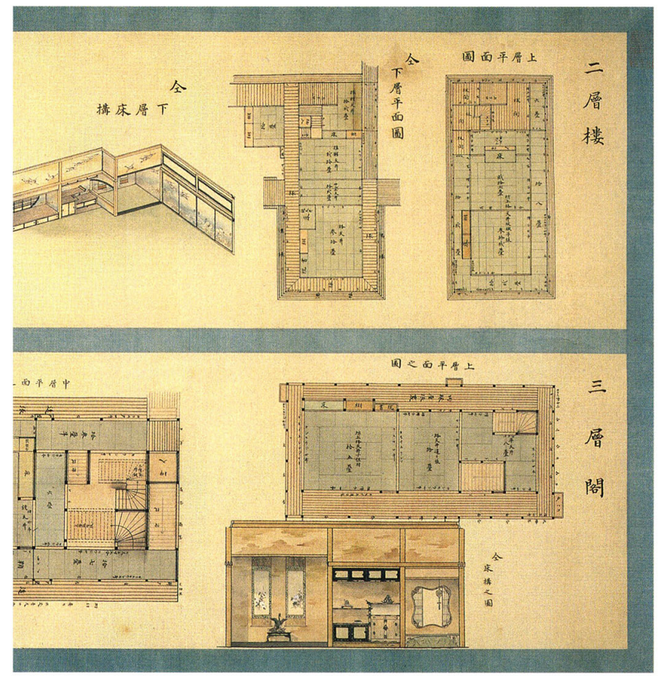
・硝子障子を採用し、四方は磨硝子（すりがらす）、中央部は透明な照硝子（てりがらす）にしている。

・二層楼と三層閣の屋根は両方とも檜皮葺で、前者は外側に反った照屋根、後者は内側に丸まったむくり屋根とし、両者のバランスを考えて設計している。

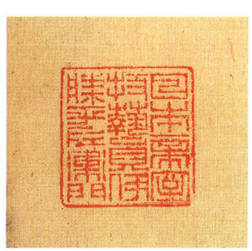
・二層楼の上層は、緞子張りの格天井になっている。伊藤は「二階の間が七十畳で、これは宴会席などに充る心算で…」と述べている。

・「奥殿上層床構之図」では、西欧人の理解を深める意図があるのか、陰影を用いて立体的に室内の様子を表している。

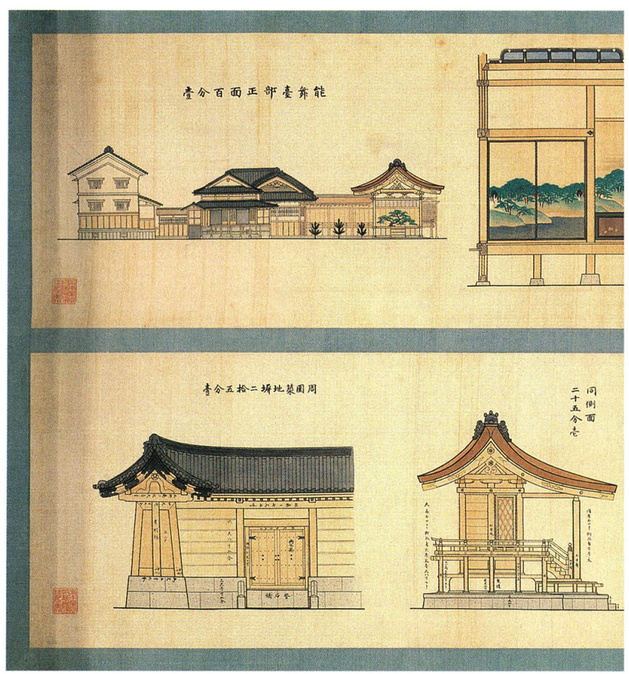


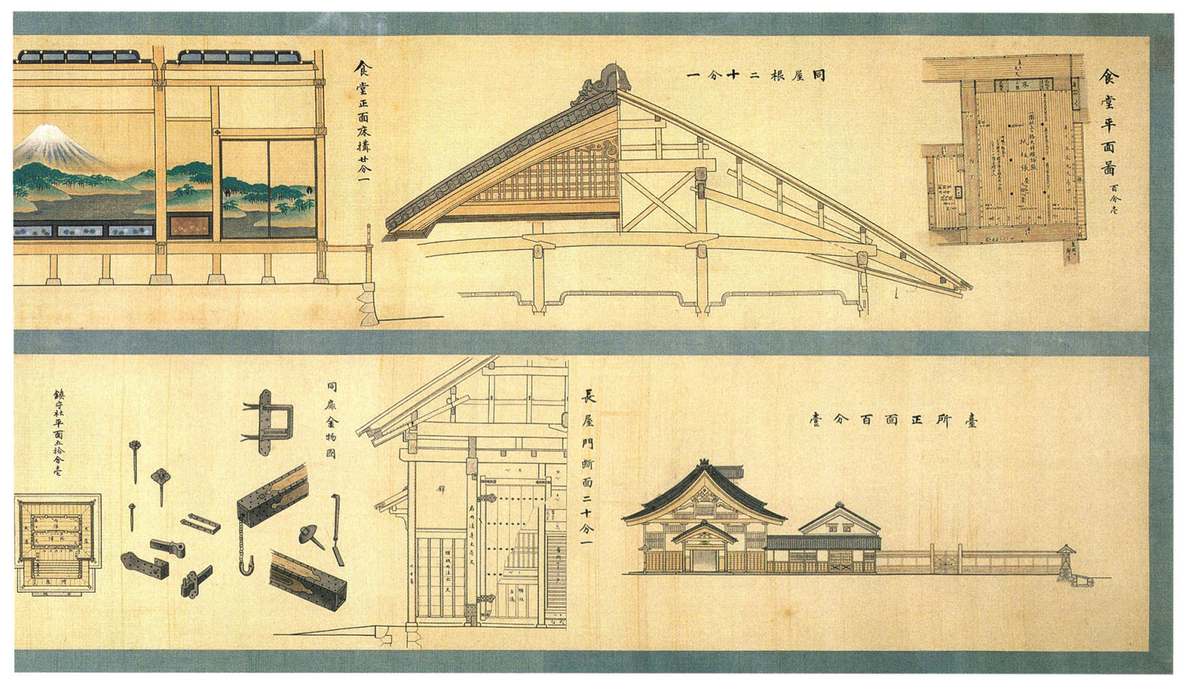


⑨二層楼・三層閣



印章





⑩食堂・能舞台・長屋門　他

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

帝室技芸員と一九〇〇年パリ万国博覧会
三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 47

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成二十年七月十九日発行

© 2008,The Museum of the Imperial Collections